



こうした営々たる人々の暮らしを象徴する日常風景が達人の心をつかむ。

読めない漁村の過去を観察

下関市街を北へ少し抜けて、山陰本線に沿って北上した。のどかな風景の中を単線の線路が海岸や山の中を通り抜けている、かつて学生時代に鉄道研究会に所属して、全国津々浦々をカメラ片手に蒸気機関車を追っていた時の気分にもどってしまった。この付近は実に、鉄道写真を撮るのに絶好のポイントが多い。

話を本題にもどす。今回まず訪れたのは「特牛」。読めやしない。とくぎゆう？ 違う！ なんと「こつ

とい」と読むそう。JR特牛駅もあり、そちらは難読駅名として全国的に名高いらしい。繰り返しつつやいて、ようやく覚えた頃、特牛の漁港に立った。目の前にはおだやかな湾が広がっている。燕が低く飛んでいるのが印象的だ。

湾と平行するように民家がある。どこへ行っても私は一本裏の道へ入り込むようにしている。そこには地元の人々の日常生活の空間がある。

さて、ここで私が興味深く思ったのは、この地区といえど、重要伝統的建造物群保存地区に指定はされていないはずなのに、数軒の民家が木造りの伝統的な様式となっている点である。しかし、明らかに最近建てられている。多くが板を焦がして黒くなった外観に特徴がある。海風や害虫から家を守るための先人の知恵が引き継がれているのだろう。

港に平行して山に沿って路地がある。入り口には、懐かしい「たばこ」のローラー看板が、私を迎えてくれるがごとく目に入った。



特牛港に立つ町田忍さん。
市街地での街歩きの際とはまた別な触覚が動き始める。

庶民文化史研究の達人

町田忍の下関レトロ徘徊記

「特牛・二見」スローな漁村の迷い方

最近ではテレビやラジオでも「庶民文化」を語ることが増えている町田忍さん。

「港町下関の小さな漁村も面白いんじゃない？」というリクエストに応えて、

今回は全国の漁船が停泊している特牛港へ。カメラぶら下げ、

潮風にまみれながら、あちこちを散策。路地裏の廃屋にさえ吸い込まれて、

下関の多面性に二度惚れする結果となった。



文・写真＝町田忍
※町田忍氏の撮影＝大野金繁



潮風に元気
もらっちゃったよ!

町田忍（まちだ・しのぶ）
昭和25年（1950）、東京生まれ。全国各地、見落とされがちな風俗意匠を研究する庶民文化史研究家。「庶民文化研究所」を設立している。著書は『昭和なつかし図鑑』（講談社文庫）、『懐かしの昭和30年代』（扶桑社）、『納豆大全』（角川文庫）、『銭湯遺産』（戎光祥出版）など約50冊。現在、文化放送「ドコモ団塊倶楽部」（毎週土曜11:00～13:00）生出演中。